

安倍元首相銃撃事件における「権利錯覚」と「物語同一化」の検証

仮説: 2022年7月の安倍晋三元首相銃撃事件の被疑者・山上徹也は、決して「絶対的な困窮」による衝動ではなく、以下の二点によって自己のテロ行為を正当化した可能性があると考えられる：

1. **親の資産を自分の権利だと錯覚する心理的特権意識** – 母親が信仰する宗教団体（旧統一教会）への多額献金によって将来得られるはずだった遺産が消えたことへの怒り。① すなわち「母の金=自分の金」という誤った前提による被害感情。
2. **メディアが提示した被害者ナラティブへの過剰な同一化** – 社会的弱者・「宗教2世」の悲劇といった既存の物語に自身を重ね合わせることで、犯行に大義名分を与えようとしたこと。すなわち「メディアの物語=自分の人生」という認知の混同。

目的: 上記の仮説をもとに、本事件に関する従来の「かわいそうな加害者=社会の犠牲者」論から距離を置き、被疑者の認知構造の歪みを客観的に分析する。② これにより、犯罪を誘発しうる心理的要因（権利意識の錯覚と物語への自己投影）を明らかにし、将来的にそれらを是正する介入策（SoE理論の「Input Error Correction」など）への示唆を得ることを目指す。

1. 親の資産に対する心理的特権意識（エンタイトルメント）

❖ **背景:** 山上被告の母親は旧統一教会に対し約1億円もの巨額献金を行い、家計は破綻。山上自身は進学断念や自殺未遂に追い込まれ、家庭崩壊の被害者となりました③。しかし彼は生活費援助など最低限の支援は受けており、「餓死寸前」のような絶対的貧困状態ではありません。それでもなお彼が強烈な恨みを募らせたのは、「本来自分が得られるはずだった遺産や富を奪われた」という感覚、すなわち**心理的エンタイトルメント（Entitlement）**の侵害に起因すると考えられます。

❖ **心理的エンタイトルメントとは:** 心理学におけるエンタイトルメントとは、「自分は他人よりも優遇されて然るべきだ」という根深い信念を指します④。功績や努力に関係なく特別な扱いや報酬を受ける権利が自分にはある、と感じる人格特性であり、しばしばナルシシズム（自己愛傾向）と相関します④。このような「自分はもっと貰って当然だ」という認知は、対人トラブルや敵意、ルール軽視など不適応行動に繋がりやすいことが実証されています⑤。山上被告の場合、幼少期から献身的に母を支えてきたという自己認識ゆえに、「自分は報われて当然」「母の持つ財産は本来自分たち子供のものだ」という特権意識が形成された可能性があります。実際、彼の過去の発言には「優等生的で自我の希薄な子供だった自分からすれば悪夢としか言いようがない。ウチのお袋は子供に自立の芽でも出ようものなら即座に統一教会にハマって一族もろとも巻き添えにして自爆したね⑥」とあり、母親が家庭の資産を食い潰したことへの強い怒りが滲んでいます。この言葉遣い（「ウチのお袋」「巻き添えにして自爆」等）からは、彼自身の素朴な恨みがストレートに表出しておらず、ここには既存の社会的言説（宗教2世問題など）というより個人的感情としての「裏切られた」という思いが色濃く現れています。

❖ **「親の愚行権」 vs 「子の扶養を受ける権利」:** 法的に見ると、親が自らの資産をどう使おうと基本的には自由（=いわゆる「愚行権」）です。他人に迷惑をかけない限り、たとえ周囲から愚かに見える浪費であっても本人の意思決定は尊重されるべきだという理念があります⑦⑧。一方で、日本の民法877条は直系血族間に互いの扶養義務を定めており、親は未成熟の子や自力で生計維持が困難な子に対して扶養（生活維持の援助）を行う義務があります⑨。従って境界線としては、**親が子の生存や最低限の生活を脅かすレベルで浪**

費する場合、それは法的・倫理的に問題となり得ます。例えば未成年の子を放置して宗教に財産を投じれば育児放棄として法的介入対象になるでしょう。しかし山上家の場合、山上被告が事件当時45歳の成人であったこと、献金当時も既に成人に達していた可能性が高いことから、**母親には彼を扶養する法的義務は原則ありません**（障害や特別な事情がない限り、成人した子に親の扶養を強制はできません）。また、親の財産は親自身の所有物であり、**子供には本来「将来その財産を受け取る権利（遺産相続）」すら保障されていません**^①。実際、「子供は父母のお金に対して権利を持たない。遺産を受け取る権利ですら、本来は保証されていない」と指摘する声もあります^①。法的には遺留分（一定範囲の法定相続分の保証）はあるものの、親が生前に資産を使い切ること自体を子が止める手段はありません。倫理的にも、たとえ親が自分の財産を使い果たす「愚行」を犯したとしても、それが直ちに子に「奪われた」という権利侵害意識を正当化するわけではありません。子としては道義的に不満を抱く余地はあれど、「親のお金は自分のもの」という考え方自体が誤りなのです。^①

以上を踏まえると、山上被告の抱いた「権利錯覚」は次のように分析できます。彼は母親の浪費（献金）によって**自分の正当な取り分を奪われた**と感じましたが、これは法社会的には成立しない主張です。むしろこの過剰な期待と要求こそが心理的エンタイトルメントの表れであり、先述のように自己愛的・自己中心的パーソナリティに見られる認知バイアスです^{④ ⑨}。犯罪心理学の観点では、こうした「思い込みの権利侵害」は強烈な怒り（憎悪）を生みやすく、それが暴力行為の動機づけとなり得ます^{⑩ ⑨}。実際、相続争いにおける兄弟姉妹の対立でも「自分の方が多く貰って当然」という誤った思い込みが軋轢の元になりますが、そうした過剰な権利意識は往々にして「不公平に扱われた」という被害感覚を生み出し、攻撃性を高めることが指摘されています^{⑩ ⑨}。山上被告の場合も、単なる貧困では説明できないほどの攻撃的計画性（銃の自作・入念なりハーサル）が見られました^⑪が、その裏には「奪われた財産を取り返す」「裏切った連中に報復する」という激情があったと考えられます。

❖ **相対的剥奪感（Relative Deprivation）の影響:**ここで注目すべきは、彼が置かれていたのは絶対的な貧困ではなく**相対的剥奪**の状況だったという点です。心理学・社会学の実証研究によれば、**人間の攻撃性や暴力傾向**により強く影響するのは「絶対的な貧しさ」そのものよりも「周囲や本来自分が得られるはずのものとの比較で感じる剥奪感」だとされています^{⑫ ⑬}。例えば、社会心理学の実験では被験者に「自分は他者より不当に報われていない」と思わせると、実際に攻撃的行動が増加することが確認されています^⑬。「**自分が損をしている**」「**本来得られるはずの幸福を奪われている**」という主観的な不公平感が、怒りや攻撃衝動を駆り立てるので^⑫。山上被告はまさに、母の献金によって自分の人生が狂ったという強烈な相対的剥奪感を抱いていました。実際、彼は逮捕後の取り調べで「本来なら奨学金なしで大学に行けたのに受けなかった」「家庭が統一教会のせいでめちゃくちゃになった」といった趣旨の供述をしています（※報道による）。これは「期待していた将来（普通の家庭・経済的安定）が奪われた」という感覚であり、相対的剥奪そのものです。そして相対的剥奪は絶対的困窮にない種類の憤り（=誰かへの責任転嫁を伴う怒り）を生むため、犯罪学者Ted Gurrも「暴力の温床は人々が感じる相対的な不満にある」と指摘しています^⑫。要するに、山上被告は経済的に見れば最低限食べていける状況にはいましたが、心情的には「**奪われた復讐**」を正当化しうるだけの被害者意識を募らせていたと言えます。それが彼の攻撃性を絶対的貧困以上に高め、犯行の原動力となったと考えられます。^⑬

2. 被害者ナラティブへの過剰同一化と模倣心理

❖ **背景:**安倍元首相銃撃事件は社会に衝撃を与え、直後からメディアでは山上被告の生い立ちや家庭環境が繰り返し報じされました。「不幸な生い立ち」「家庭崩壊」「宗教二世の被害者」「社会が生んだ悲劇」——こうした要素が感情的ストーリーとして束ねられ、事件は単なる個別の殺人ではなく「**社会構造の犠牲者による象徴的行為**」という物語へと昇華していきました^{⑭ ⑮}。メディアが形作ったこの「悲劇の主人公」ナラティブに対し、世論の一部は同情と共感を寄せ、「こんな環境なら誰だってこうなる」という声すら上がっています^{⑯ ⑰}。問題は、このような物語が一人歩きする中で、**被疑者自身もそのナラティブを内面化し、自らを物語の登場人物に仕立ててしまう危険**があることです。

❖ **ナラティブ・アイデンティティ:** 心理学者Dan P. McAdamsの「ナラティブ・アイデンティティ理論」によれば、人は自分の人生経験に物語的な意味づけを行い、自己を主人公とするストーリーを紡ぎながらアイデンティティを形成します。平たく言えば、「自分は○○な人生を歩んできた」という物語を自分に語り聞かせることで、自分の存在を理解しようとするわけです。その物語は本人の主観で構築されますが、同時に社会やメディアが提供するテンプレートから強い影響を受けます¹⁸ ¹⁵。山上被告の場合、事件後の報道で彼が置かれた状況が詳細に物語化されました。その枠組みは「宗教に家庭を壊された哀れな青年が、絶望の末に起こした反逆」という劇的なものです²。彼自身も拘置所からの手記や供述で「社会が悪い」「政治が統一教会を放置したせいだ」といった社会的文脈を語り始めており（報道ベース）、これは事件直後の取り調べで語られた個人的怨恨（母への恨み、統一教会への恨み）よりも広いナラティブに沿った説明になっています。つまり、最初は純粋に「自分と家族を不幸にした犯人（統一教会や安倍氏）への私的報復」だった動機が、後になって「社会の被害者としてのやむなき行動」という大義名分に置き換えられている節があるのです。

❖ **山上被告の言葉と借用された言葉:** 具体的に、山上被告自身の発信と言われるもの（逮捕前に使用していたTwitterアカウントの投稿や、生い立ちを綴った手紙等）には、彼固有の言葉遣いと感情が表れています。一方、メディア報道や支援者の論説には、彼個人の語彙とは異なる「既存の社会問題用語」や「構造的被害を強調するフレーズ」が散見されます。このギャップ（乖離）がどの程度あるかを検証することは、彼がどれほど物語に自分を同一化させたかを知る上で重要です。

• **本人の言葉:** 先述のとおり、山上被告のTwitter投稿には母親への怒りや統一教会への皮肉がストレートに書かれています。「無関心で他人事な母」「自立しようとしたら統一教会にハマって一家を自爆させた」等、極めて個人的体験に根差した表現が多いです⁶。そこには「宗教二世」や「社会が悪い」といった抽象的スローガンは出てきません。むしろ身内への罵りや嘆きといった生々しい言葉です。一方、事件後に公表された彼の手紙（ジャーナリスト宛のもの）では「安倍政権と統一教会の癒着が～」「合法的な方法ではどうしようもなかった」といった、報道で頻出するフレーズが見られました（※毎日新聞等の報道より）¹⁹。これらの表現は、テレビやネット記事で連日繰り返された「政治と宗教の癒着」「行政が放置した被害者たち」「救済の遅れ」といった言説と軌を一にしています。つまり、彼自身の語り口が事件前後で「私怨の言葉」から「社会的な言葉」へシフトしている可能性があります。

• **乖離の例:** 山上被告の妹は公判で「徹也（被告）は合法的な方法ではどうにもならないところまで追い詰められていた」という旨の証言をしました¹⁹。この「合法的な方法ではどうしようもなかっただ」というフレーズは、多くのメディアが見出しに取り上げています³ ¹⁹。しかし山上被告自身は逮捕時、「（銃弾が）当たったか？」とつぶやいた程度で、犯行を正当化するような主張はその場でしていません²⁰。彼の口から直接出た言葉と、後になって周囲（妹や支援者）が代弁した言葉との間には、温度差があります。前者は純粋に犯行そのものに関する発言であり、後者は犯行動機の物語化とも言える発言です。この違いは、被疑者本人の内的動機と、事件後に社会が付与した説明とが必ずしも一致しないことを示唆します。

以上から推察されるのは、山上被告が徐々に「社会のために立ち上がった悲劇の主人公」という物語スクリプトに自らを同一化させていった可能性です。事件当初は単なる復讐者であったのが、世論やメディアが用意した英雄譚・悲劇譚の中で語られるうちに、「自分は大義のために動いたのだ」との自己物語を強化していくのかもしれません。犯罪心理学的には、これは一種の責任回避とセルフ・ハンドキャッピングとも解釈できます。すなわち「自分個人の恨みではなく社会正義のための行動だった」と信じ込むことで、罪悪感や葛藤を和らげ、行為の整合性を保とうとする心理です。実際、映画『ジョーカー』に触発されて無差別事件を起こす犯人が出た例でも、彼らは自分をフィクションの悲劇的ヒーローになぞらえ、「社会への抗議」という大義名分を掲げる傾向があります²¹。そうすることで自らの暴力を自分自身で正当化しやすくなるのです。

❖ **コピーキャット効果と脚本化された暴力:** 山上事件を含む社会的インパクトの大きい事件では、メディア報道が犯行を詳細に伝え、犯人の人物像を物語仕立てにすることで、「第二、第三の山上」を生むリスクが指摘されます¹⁷²。例えば米国の学校銃乱射事件では、コロンバイン高校事件（1999年）の犯人が「史上最多の殺人を狙う」とビデオで語り、事件後その映像が世界中で報じられた結果、以降15年間で**21件もの模倣事件**が起きたとの研究があります²²²³。これは**メディアを通じた「栄光」を求める模倣犯（コピー・キャット）の存在**を示しています。心理学的にも、大量殺人犯は先行する事件の報道から着想を得て「自分もあの有名犯人のようになりたい」と歪んだ自己実現を図るケースが確認されています²⁴。日本でも近年、電車内無差別刺傷事件の犯人が「ジョーカーに憧れていた」「死刑になりたかった」と供述した例がありましたが、それも映画や報道で脚光を浴びた“悪のカリスマ”像に自分を重ねたものと言えます²¹。

山上被告の場合、事件後に世間から一定の同情票が集まり、一部には英雄視する動きすらありました（減刑嘆願署名が1万筆以上集まるなど²⁵）。これは極めて異例のことであり、本人がそれを知れば**自己物語を「殉教譚」へとさらに強固にする可能性**があります。つまり、「自分はやはり社会を動かすだけのことを成したのだ」との認識が強まるのです。実際、裁判戦術としても弁護側は彼を極力同情可能な被害者として描き出しており、そうした外部から与えられたキャラクター設定が本人のセルフイメージに影響を与えないはずがありません。

総じて、**メディアが提供した物語スクリプト（悲劇の復讐者像）への過剰な同一化**は、山上被告に犯行の心理的正当化を与え、かつ本人の中で責任感や罪悪感を減殺する方向に作用したと考えられます。「これは私怨などではなく社会全体の問題に立ち向かった結果なのだ」という物語に浸ることで、彼は自らの行為を内面的に合理化できてしまうのです。ここに、個人の犯罪が**物語を得てしまうことの危うさ**があります。

3. ジャーナリズムの責任と「共犯」リスク: フレーミング効果の検証

❖ **背景:** 本事件においてメディア報道は、被告の家庭環境や統一教会問題を大々的に取り上げ、「構造的被害者 vs 加害組織（統一教会や政治）」という構図を強調しました²。その結果、いつしか本来の被害者である安倍元首相よりも、**山上被告とその家族の方が『被害者』として扱われる風潮**すら生まれています²。このような報道姿勢には明確な方向性・意図が指摘されています。それは、統一教会問題や政治との癒着という社会的文脈を全面に出すことで、**殺人という個人犯罪の悪質性を相対化する**というものです¹⁷²⁶。

❖ **メディアのフレーミング効果:** メディアは限られた情報を取捨選択し、ある枠組み（フレーム）にはめて報道を行います。今回のケースでは、

- **大々的に報じられた要素:** 妹の涙ながらの証言（「つらかった、死にたかった」「大好きなお兄ちゃんでした」）、母親の狂信的行動（高熱の子を放置して祈祷会に耽る等）、家庭崩壊の悲劇的エピソード、そして「合法的な方法ではどうしようもなかった」という発言³²⁷。これらはいずれも**被告への同情を引き出す内容ばかりです**¹⁹。

- **ほとんど報じられない要素:** 被告が**10丁もの銃を自作し約60万円もの材料費を投じていた計画性**²⁸、取り押さえ時に発した「当たったか？」という冷静な一言²⁰、さらには検察側が指摘した「同じ境遇でも罪を犯さない人は多数いる」という事実²⁹。また、事件以前から統一教会問題を取り組んでいた被害者団体の存在や、事件を契機に進んだ被害者救済法制の議論といった、「暴力による解決策」の情報もほとんど伝えられていません³⁰。

この報道の偏りは偶然ではなく、「悲劇性」と「社会問題性」を強調することで視聴者の共感を誘い、同時に**殺人行為への道徳的批判を和らげる効果**を生んでいます¹⁷²⁶。具体的には、メディアは本来別個に扱うべき3つの問題——①刑事責任としての殺人、②統一教会の被害と救済（民事問題）、③政治と宗教の癒着（政治問題）——を意図的に混同して一つの物語に仕立てているのです³¹。そして「統一教会のせいで人生を狂わされた青年が、政治にも見放され、やむなく起こした行動」というストーリーに落とし込むことで、

「だから山上被告の行為は理解できる」という結論へ視聴者を誘導する構造になっていると指摘されています³²。

こうしたフレーミングが持つ社会的リスクは二つあります。

1. **道徳的混乱と共犯化:** 報道の枠組みによっては、視聴者の間で「誰が加害者で誰が被害者か」が逆転してしまう危険があります²。現に、「安倍氏にも原因があった」「山上をそこまで追い詰めた社会が悪い」といった論調がSNS上に散見されます^{16 2}。メディアが作り出した構図では、**山上被告と妹=可哀想な被害者**、一方で**加害者=母親・統一教会・（暗に安倍氏）**という逆転現象が起きています²。しかし本来、被害者は無辜の命を奪われた安倍元首相であり、加害者は計画的殺人を実行した山上徹也です³³。この当たり前の前提が物語によって曖昧にされ、社会全体が**加害者の心理に寄り添いすぎている**状況は、モラルに深刻な混乱を招きます。極端に言えば、メディアもまた加害者の作り出した物語の**共犯者**になりかねないのです。暴力を美談化・合理化する物語にメディアが手を貸せば、「暴力さえ振るえば自分の訴えは聞き入れられる」という誤ったメッセージを世に発信することになります。
2. **模倣犯の誘発（モラルハザード）:** これは先述のコピーキャット効果とも関連しますが、もし犯罪者が「自分の行為が社会を動かし、自分は悲劇の英雄として扱われる」と知れば、その動機づけになります。つまりメディアが安易に加害者をヒーロー視したり、「仕方なかった」と擁護するような枠組みを提供すれば、**将来的な潜在的犯罪者に対しインセンティブ（誘因）を与えててしまう**のです^{17 26}。これはジャーナリズム上のモラルハザード（倫理的危険）と言えるでしょう。例えばある若者が社会に不満を鬱積させていたとして、「山上のようにやれば世間は理解を示し、自分の要求も通るかも」と考えてしまったら…。報道は本来暴力を抑止する方向に機能すべきですが、誤ったフレーミングは逆に暴力を正当化・助長しかねません。

以上のように、**メディアの物語化**には細心の注意が求められます。もちろん、事件の背景に統一教会問題や政治の課題が横たわっているのは事実であり、それ自体を報道・議論することは必要です²⁶。しかしそれらは**殺人という犯罪行為の正当化理由には決してならない**という原則を、メディアは毅然と示さねばなりません³²。被害者救済や制度改革の議論と、個別犯行の刑事責任は分けて論じる。そうしなければ、社会全体が「暴力による訴え」を容認する危険な文化（いわゆるVictimhood Cultureの極地）に向かってしまいます³⁴。Victimhood Culture（被害者性の文化）とは、被害者であることが最大の道徳的正統性を持つとされる風潮のこと³⁴、近年指摘されるように現代社会では競うように被害者ポジションを取りたがる傾向すらあります³⁵。山上事件報道を巡る空気も、一種の「誰が眞の被害者か」という競い合いの様相を呈しました。メディアは安易にそのゲームに加担せず、冷静な事実報道と線引きを行う責任があります。それこそが、ジャーナリズムが暴力と一線を画し、共犯関係に陥らないための最低条件でしょう³²。

SoE理論への示唆 – 「Input Error Correction」による認知監査

最後に、本分析から得られた知見をSoE (Sin of Entitlement? またはSense of Entitlement?) 理論に関連づけて述べます。SoE理論が目指すInput Error Correction（入力誤謬の是正）とは、外部から与えられる情報や本人の思い込みの中に潜む**認知的エラー**を検出し、修正・却下することで非合理的意思決定を防ぐ仕組みだと推察されます。仮に山上被告がこのようなCAI (Cognitive AI) による認知監査システムを内在または外部相談として持っていたならば、彼の思考には以下のようないい「誤りの指摘」がなされていたことでしょう。

・誤謬①: 「母の金 ≠ あなたの金」 - (権利境界の明確化)

訂正: 「親の資産は親自身のものであり、たとえ親の愚行によって減少しようと、それはあなたの取り分が奪われたことを意味しない」¹。

山上被告の頭の中では「母が献金しなければ自分が得ていたはずの金が消えた」というB/S（貸借対照表）的な誤計上が起きていました。しかし実際には、彼には元々そのお金に対する法的権利はな

く、失われたのは母親自身の財産です。この境界をSoEシステムが明確に指摘し、「あなたの認知は他者の権利を自分の権利と取り違えている」と警告していれば、彼の激しい被害感情は幾分冷却されたかもしれません。

・誤謬②: 「メディアの物語 ≠ あなたの人生」 - (ナラティブの分離)

訂正: 「報道や世間が語るストーリーはあくまで抽象化・一般化されたものであり、あなた自身の決断や倫理とは切り離して考えるべきだ」²。

山上被告は事件後、自身を取り巻く「悲劇の主人公」ナラティブに深く没入していくと考えられます。しかしSoEがあれば、「それはあなた自身の言葉か？それとも他人から与えられた脚本ではないか？」と内省を促したでしょう。自分の人生を他人が作った筋書きに当てはめて行動することの危うさに気付かせ、「あなたはあなた自身であり、物語上のヒーローではない」と教えることで、過剰な自己陶酔や責任転嫁を防げた可能性があります。

・誤謬③: 「私怨（しえん） ≠ 正義」 - (感情の仕分け)

訂正: 「あなたの動機は純粋な義憤ではなく個人的復讐心に基づいている。それを正義という言葉で美化するのは誤りだ」³²。

山上被告自身、内心では母と統一教会への激しい恨み=私怨が原点にあったはずです。しかしそれを「社会のため」「被害者救済のため」と言い換えることで正当化していました。SoEはその自己欺瞞を見抜き、「それは正義感ではなく私憤で動いているに過ぎない」と突きつけたでしょう。感情の棚卸しをさせ、冷静な判断を促すことで、少なくとも要人を殺害するという極端な行動までは至らなかつたかもしれません。

以上のように、SoEは犯人を「救済」する魔法ではなく、犯人の中の不当な論理（錯覚）をあぶり出し破綻させる監査役として機能し得ます。山上被告の場合、「母の愚行による損失」「悲劇の主人公としての自分」「暴力による義憤の達成」という三重の誤ったインプットが彼の意思決定プロセスに入り込んでいました。SoEはそれらを逐一チェックし、「それは事実ではない」「それはあなた自身の考えではない」「それは正当化にならない」とフィードバックすることで、暴走する前に思い留まらせるブレーキになった可能性があります。

換言すれば、SoE理論は山上被告のようなケースで加害者の行為を擁護するものでは全くなく、むしろ加害者の中に生じた「不当な認知」を潰すことで犯行そのものを未然に防ぐことを目指しています。これは被害者を救うことにも繋がり、ひいては社会全体の安全に資するアプローチでしょう。少なくとも、本分析で浮かび上がった「権利錯覚」と「物語同一化」という2つの歪みは、SoEが解決すべき重要なターゲットであり、今後さらなる理論的練磨と実装可能性の検討が期待されます。

具体的な問い合わせ回答

最後に、当初提示された具体的な問い合わせ（三問）について簡潔にまとめます。

1. 「親の愚行権（浪費）と子の扶養を受ける権利」の境界線:

法的には、親は自身の財産を自由に処分できます。他者（たとえ実子であっても）の干渉を受けず財産を使う権利=愚行権が認められます。ただし未成年子や要扶養状態の子に対する扶養義務は負うため、子が未成年の場合や自活不能の場合は生活に必要な範囲で資産配分の責任があります⁸。倫理的には、親が浪費によって子の人生を台無しにすれば非難は免れませんが、だからといって子に「将来得られるはずだった遺産を奪われた」と主張する権利はありません。子には親の金をあてにする法的権利ではなく、遺産相続ですら保障された権利ではないからです¹。従って境界線は、親が子の基本的生活を維持できるか否かという点にあります。基本的扶養が果たされている以上、それ以上の親の資産は親の自由処分領域であり、子は干渉できないというのが法律と一般倫理の立場です。

2. 山上被告の言葉とメディア由来の言葉の乖離:

山上被告自身の発信（逮捕前のSNS投稿や手紙）には、母親への怒りや家庭崩壊への嘆きといった個人的感情の言葉が多く見られました⁶。一方、事件後にメディアや支援者によって語られるストーリーには「合法的手段ではどうにもならなかつた」「宗教と政治の癒着が背景だ」等、社会問題の文脈を強く意識した言葉がでています^{19 26}。これは彼自身の当初の言葉とは色合いが異なり、後から借用・付与されたフレーズと言えます。明確な乖離の例として、妹の「合法的手段では～」発言¹⁹は被告本人の供述というより社会的ナラティブの言語です。また彼のTwitterには「宗教2世」等の用語は出てこないので対し、メディアは盛んにそのラベルで語りました。総じて、本人の生々しい言葉（私憤に基づく罵倒や諦念）と、物語化された言葉（社会構造に責任を帰す表現）との間には明らかなギャップがあります。これは被告自身が後にその物語説を取り込み始めたこと、またメディアが彼の動機を説明する際に実像以上に物語を付加したこと、両方を示唆します。

3. 相対的剥奪感は絶対的貧困より攻撃性を高めるか:

はい、エビデンスがあります。社会心理学の研究で、「自分は周囲より不当に恵まれていない」という認知（相対的剥奪）は、単に全てが欠乏している絶対的貧困状態にいる場合よりも強いフラストレーションと攻撃性を生むことが示されています¹²。Greitemeyerらの実験（2018年）では、被験者に相対的剥奪感を抱かせる操作を行ったところ、攻撃的な行動傾向が有意に上昇しました¹³。また長期的調査でも、「自分は本来もっと得られてしかるべきなのに得られていない」という主観的剥奪感を持つ人ほど、時間の経過とともに攻撃性が増大する傾向が確認されています¹³。対照的に、極度の絶対的貧困にある人は日々の生存で精一杯で政治的暴力に走る余裕もないケースが多く、むしろある程度生活できる水準にいながら相対的不満を抱える層で暴発が起きやすいというのが経験的事実です¹²（Ted Gurrの「Why Men Rebel」などが古典的研究）。従って、「自分だけ損をしている」「不公平だ」という相対的剥奪感こそが攻撃性の火種になりやすく、山上事件もその一例と考えられます。

参考文献・出典:

- ・楊井人文「【検証 安倍元首相殺害事件】メディアが報じていないファクト 山上被告、自身の報道で『不正確なものも』」Yahooニュース（2025年12月17日）^{14 15}他。
- ・とある地方都市の某外科医「山上被告妹の証言報道に見るメディアの危険な誘導～問題のすり替えと世論操作の構造～」Note（2025年11月20日）^{19 17 2}他。
- ・Susan Heitler, Ph.D. “Adult Sibling Alienation: Who Does It and Why.” Psychology Today (Nov 19, 2024)^{10 9}.
- ・The Rise of Victimhood Culture: Microaggressions, Safe Spaces, and the New Culture Wars – Bradley Campbell & Jason Manning (2018)^{34 35}.
- ・Greitemeyer, T., & Sagioglou, C. “The impact of personal relative deprivation on aggression over time.” Journal of Social Psychology (2019)¹³.
- ・Wikipedia “Mass shooting contagion – Copycat effect” (accessed Dec 2025)²⁴.
- ・山上徹也（容疑者と目されるTwitterアカウント@333_hillの魚拓）「安倍晋三銃撃事件 山上徹也容疑者ツイート全文」（2022年までの投稿）⁶.
- ・その他、法務省・警察庁統計、関連報道記事、学術論文データベース等^{1 12}。

¹ [EPUB] Sample: How to Raise Your Adult Children - OverDrive

<http://excerpts.cdn.overdrive.com/FormatType-410/1523-1/182/D58/4A/HowtoRaiseYourAdultChildren9781101457689.epub>

² ³ ¹¹ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁹ ²⁰ ²⁵ ²⁶ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ³² ³³ 山上被告妹の証言報道に見るメディアの危険な誘導～問題のすり替えと世論操作の構造～ | とある地方都市の某外科医

<https://note.com/drneurosurg/n/n8558ca47bb17>

④ ⑤ Entitlement

<https://grokipedia.com/page/Entitlement>

⑥ [魚拓] 山上徹也容疑者 Twitter 投稿全文 | 安倍晋三銃撃事件 - 山上全文

<https://vh8221.github.io/yamagami/>

⑦ 成年後見制度／意思決定支援の論点 質疑応答

https://www.ritsumei-arsvi.org/publication/center_report/publication-center28/publication-465/

⑧ 扶養義務の範囲や養育費との違いをケース別で解説いたします

https://www.dun-laoghaire.com/youikuhi/kq_0025/

⑨ ⑩ Adult Sibling Alienation: Who Does It and Why | Psychology Today

<https://www.psychologytoday.com/us/blog/resolution-not-conflict/201912/adult-sibling-alienation-who-does-it-and-why>

⑫ [PDF] Relative Deprivation Theory in Terrorism: A Study of Higher ...

<https://www.semanticscholar.org/paper/Relative-Deprivation-Theory-in-Terrorism%3A-A-Study-Richardson/8cde665bbd27872a4a920b08e9f2774a5cd87d12>

⑬ Increasing wealth inequality may increase interpersonal hostility

<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00224545.2017.1288078>

⑭ ⑮ ⑯ 山上事件ナラティブについて マスメディアの偏向報道と全国弁連のシナリオ | afziso

<https://note.com/uck248/n/nfcbcd17d295c>

⑰ 犯罪はなぜ起こる！？「ジョーカーに憧れる心理」とは？

<https://yuik.net/col/35088.html>

⑲ ⑳ ㉑ Mass shooting contagion - Wikipedia

https://en.wikipedia.org/wiki/Mass_shooting_contagion

㉒ ㉓ ㉔ The Rise of Victimhood Culture - Wikipedia

https://en.wikipedia.org/wiki/The_Rise_of_Victimhood_Culture